

麻生路郎★主宰

SENRYU ZASSI
Published monthly

川柳雜誌

NO.4 VOL. I

憲法と川柳

福田山雨樓

新憲法は公布された。日本は新しい歴史を書き始めたのだ。國民は新しい希望に胸をふくらませて、平和への熱望に起上らうとしてゐる。民主主義を世界に宣言したこの新憲法は穂積博士や山本有三氏等を中心にして、平がなな平易な文章を以て綴りかへられ、國民の總意によつてどこ迄も國民に親しみ易い憲法が生れたのである。この憲法の根本精神である自由と平和と眞理とは、くしくも川柳のこゝろと一脈のつながりがあるやうに自分は思はれてならない。

三月五日内閣總理大臣を宮中に召され、憲法改正を仰出になつた勅語の中に「日本國

民が正義の自覺に依りて平和の生活を享有し、文化の向上を希求し」とのお言葉がある。この「正義の自覺」こそは川柳が持つ正義感、即ち諷刺、皮肉の發する源なのである。更に「平和の生活を享有」とあるは、川柳の中核をなすユーモアの母体である。次の「文化の向上を希求」するの、川柳の穿ち、即ち俗の眞を貫かんとする氣持に外ならない。

憲法の第三章、國民の權利及び義務の條章によつて、輝

不朽洞句抄

麻生路郎

ギリ貧に今更家の廣いこと
雜草を喰へども云ふ恩師瘦せ

、松江一泊 (二句)

灯を消せば松江大橋月のもの

く自由の金字塔が打ち建てられたのであるが、國民の自由を妨げるあらゆる障害と壓迫に對して、川柳子の皮肉は容捨なく飛びかかつてゆくのである。川柳はある意味で憲法の番人を勤めるのである。

マ元帥が日本の新憲法發布に關し聲明書を發した中に「人類の正義と寛容と理解を信する方向に新しい道を拓くのである」と述べてゐるがこの正義、寛容、理解が、諷刺、ユーモア、穿ちと肝膽相照らすものがあることも面白いと

男同志の會話 短し旅の宿

糞虫庵に芭蕉を偲ぶ四句

みのむしの何代目かがよきかり

糞虫庵けふ發つ草鞋新らしく

糞虫庵の夢は吉野の花ざかり

後人の月並こゝへ池の句碑

思ふ。

戰時中極端な彈壓を受けてとばを封ぜられた文學の分野は、今や大手を振つて叫び、訴へ、詠ふことが出来るやうになつた。眞の川柳、よき川柳が生れる時代と環境が訪れたのである。川柳本來の機能を發揮すべきチャンスが拓けたのである。川柳はのびるだけのである。この期が來したのである。この期を逸してはならず、これからの川柳への期待は大きい。云ひかへれば川柳は憲法と云ふ至高至大なクレインによつてつかみ上げられたのである。

曩に路郎主幹は「笑ひの復興運動」についてのべられたが、永世に亘り平和を希求する日本國民に對して、川柳のよきユーモアは必ずアツピールするであらう。又さうなくてはならぬ。

眞理の探求は學問の道である。しかし川柳が表白する眞實(よき意味での穿ち)を貫く精神も亦、川柳の尖鋭的な表現形式と相俟つて、人間性の鑛脈を深くさぐり當てることであらう。

岩上順一氏は「毎日」で政治は文學に優位するかと云ふ問題に答へた一文の中で「文學藝術はより良い人間に、より良い社會に到達する道を探求することだ。(中略)文學藝術の主要目的がヒューマニズムの實現にあるとしたら、

かゝるヒューマニズムはデモクラシーの實踐を通じての以外には到達の道はない」とのべてゐる。川柳文學が市井、田園の中にあつて、ヒューマニズムに盡す役割は少しとしない。

山本有三氏は「朝日」で「戦争放棄と日本」と題し「われわれは敗戦國民には相違ないが、今や眞理と自由と平和とを口ざして、新しい國家をきずきあげんとしてゐるのである。だれに遠慮もいらないう。かしらをあげ、胸を張つて、信する道をどしんどしと踏みしめて行つてもらいいたい」と結んでゐる。川柳子もとりよその心でありその足どりである。そして愈々川柳をみがく覺悟である。

高血圧

動脈硬化

心悸亢進に

ハセスロール錠

50錠 ¥ 8.30
100錠 ¥ 15.00

塩野義製藥





續川柳講座

(4)

麻生路郎

動く動かぬ といふこと

他人の句を批評する場合、或は自己の作品の良否を判断するメヤスの一方法として、動く動かぬといふことが云はれて居ります。これは單に川柳に限らず、短歌でも俳句でも云はれて居ります。ある事物を表現する場合に、間に合はせの語彙を使用したとすれば、その表現は適確さを失ひます。従つて第三者は作者の句意を充分に正解し、餘すところなく鑑賞することが出来なくなり得ます。

詰り代用品の語彙は代用品だけの値うちしかない句を構成するものであります。

フランスのクローベルといふ小説家が、その弟子のモーパーサンに教へて、ある事物を表現する場合に一つの名詞、一つの動詞、一つの形容詞、一つの副詞しかないことを説いて居りますが、全くその通りで、同意語があるからその何れを使用しても同じであると思ふのは大變な間違ひであります。例へば女を表はす同意語に、女、妓、情婦

婦人、女性などいろいろありますが、皆それ／＼に異つたニュアンスを持つてゐるのであります。

もし云ふ譯のものではありますせん殊に女性といふ語の如きは、よ／＼と訓む場合に、よしやうと訓む場合では女には違ひないが全く違つた内容となります。同じ文字でありながら、句意がまるツきり違つて来るのでありますから同意語であるからと云つて、安易に考へて間に合せの語で作句いたしますと、作者の表現せうとする内容の適確さを失ふことは云ふまでもありません。まゝしてある事物を表現せうとする場合に、尤も適切な語や動詞を使用しないとしたならば句意がボヤけてしまひ、作者の意のあるところを第三者に傳へることが全然不可能となるばかりでなく、實に粗笨な句が出来上るのであります。そしてそれ等の語や動詞を更に他の語や動詞と取替えて見ても、一向引締つた内容とならない場合動く／＼と稱して居ります。動かないといふのはその反對に、作家の意圖する内容にふさわしい適確な語彙が

使用せられてゐる場合を云ふのであります。假りに他の語を入れ替へて見た場合、その句の内容が不自然になつたり句の價值が減少したとすれば入替へた句は即ち動く句となり、入替へぬ以前の原句は動かない句だと云へるのであります。

次に實例を擧げて解説することにしたします。

大阪の四天王寺を詠んだ句

行先のきまらぬ足が天王寺
天王寺の土産を孫に馬鹿に
犬つれて四天王寺を通りぬけ
竹獨樂の音も春らし天王寺

「行先の」句は、四天王寺を詠んだ句としてうけとれぬこととはないが別に四天王寺でなくとも、阿彌陀池であつても東大寺であつても大した違ひが無いといふのでは、この句は優れた句だとは云へないことにになります。四天王寺を詠む以上、一讀して四天王寺でなければならぬ管のみのであります。ところがこの句が天王寺としても東大寺としても同程度の價值しか持たない句だとすれば、所謂動く句だといふことになり、作者の再考をうながす以外に、この句を生かす道はないのであります。

頃には、なあんだ釣鐘せんべいかと孫に馬鹿にされたと云ふのでありますから、前述の句よりはいささか天王寺らしさを出してはゐますが、これも亦、必ずしも天王寺でなくとも、他の寺であつても詠めない句ではありませんから、矢張り動く句だといふ所しりはまぬががたいのであります。その次の「犬つれて」の句にいたしましても犬を連れて通り抜けることが四天王寺でなければ當て嵌まらないと云ふ適確さがでない以上は動く／＼と云ひ得るのであります。

ところが例句の四句目
竹獨樂の音も春らし天王寺

(其象)

と云ふ句は前三句とはいささか趣きが違つて一讀しただけで、なるほど四天王寺の春の彼岸の情景を髣髴とさせて居ります。竹獨樂のあのブーンといふうなりが、いかにも春の彼岸と、こころよい調和を感じさせられ四天王寺のあの善男善女の雜踏を思はされると同時に、孫の手を曳いて竹獨樂の店に立つ老婆の姿がハツキリと眼に浮んで来るのであります。

竹獨樂の響一つで、天王寺境内の、雰圍氣を巧みに描出してゐることが感じられるのであります。斯うなると、この句の下五に阿彌陀池を持つて來ても、東大寺を持つて來ても、天王寺ほどにビタリと當て嵌まらない、そこで下五

に天王寺と据えたことは動かないと云へるのであります。詰まり四天王寺といふ題下にこの句を動かすか動かぬかと云へば動かぬ句だと云ふことになり得ます。なるほど、動く／＼と動かない句とを比較して見ると、動く／＼に對しては今一ト息と云ふ物足らなさを感ずるがそれでは動かない句でさへあれば、上乘の句であるかと云へば必ずしもそうではないのであります。動く／＼は動かない方がいいが、動かないと云ふだけが句を價值づける物尺ではありません。その點を誤解しないことが肝要であります。一例を擧げればよく結(はる)く、後家の髪と云ふ古句があります。これなどは動く／＼の觀點からすれば、穿ち句として動かない句だと云へますが、懸け調の點から視て、狂句であるとして、川柳では全然排斥して採らない句とされて居ります。では狂句とはどんな句を云ふのでありますかと云ふ質問が出ると思ひますが、こゝで川柳と狂句の差違を述べてゐると、話が横道に外れることになり得ますから省略いたしますが兎に角、動かぬから名句であると、決めてかゝる譯にはいかぬと云ふことだけを知つて置いていただきたくのであります。と申しますと動かぬ句で同時に悪い句は總べて狂句であるかと云へば、そうでもありません。動

かないが、川柳詩としての味がないといふ句もあるのであります。

では、「竹獨樂」の句が四天王寺を詠んだ句として、動かない句だとすれば、外にも四天王寺の句は詠めないのではないかと云ふ疑問が生じて来るだらうと思ひます。それは尤もな疑問であります。四天王寺を描出するの竹獨樂でなければ描出出来ないといふ譯ではなく、亀ノ池によつて四天王寺を、石ノ鳥居によつて四天王寺を、今はありませんが、大釣鐘によつて四天王寺をと云つたやうに、他の風物によつて四天王寺を描出することが出来るのであつて、それは作者の句の掴み方が違つて來れば、いくらでも四天王寺の句を詠むことが出来るのであります。

四天王寺の春の彼岸の情景を詠むのに竹獨樂を持つて來て、動かない句としたところに作者の手柄があるのであります。では竹獨樂で四天王寺を、この句以上に詠むことは出来ないかと云へば、それは絶対に出来ないといふ云へません。今後より以上に巧みな句を見せてくれる作家があらはれて来るかそれは豫測することが出来ません。しかし例令、より以上巧みな竹獨樂の句が出来たとしても、前例の句も矢張り動かない句として認められ、何れも佳吟として兩立するか、その句によつて

前句が抹消されるかは、そうした句に事實接して見なければ断定し得ない問題であります。又、作家の主観によつて甲はAの表現の方が動かないでBの表現の方が動くといふ動方と、乙はAの表現の方が動いて、寧ろBの表現の方が動かないといふ觀方の二様となり、僅かな措字の違いで、A句のは非常に派手な句となり、Bの句は非常に地味な句となり、派手好きな甲はAの表現を動かないといひ、地味好きな乙はBの表現を動かないと云ひます。この場合AもBも動かない句だとは云へませんが、それは作者の主観によつて何れかに決するのであります。俳聖芭蕉にしても動く動かぬ即ち措字の適切か、どうかと云ふことには随分苦心されたものらしいのは、彼の有名な

古池や 蛙 飛び込む 水の音
といふ句が決定づけられるまでは、
山吹や 蛙 飛び込む 水の音
としたものか、「古池や」とした方がいゝか、惑はれて門人達に相談されたそうであります。すると其角は「山吹や」の方がいゝでせうと云つて山吹説を採つたそうでありますが、芭蕉は「古池や」の方に決められたのだそうであります。この場合、派手好きな性格の持主の其角にすれば「古池や」よりも「山吹や」の方が動かないと云へるし、

地味な性格の持主の芭蕉が「古池や」を動かないものとして最後の斷案を下したことに想到いたしますと、動く動かぬと云つても絶対的なものではないことは右の例示によつて明らかであります。假りにりとして捺すゴム印の太くなり

（鬼怒夫）
と云ふ句に對し同時に、
笑はるに捺すゴム印の太くなり
と云ふ句が誰かによつて詠まれたといひます。「笑はされて」の方より「むつとして」の方が、動かないとは云ひ切れないのであります。「むつとして」と「笑はされて」の違ひは「古池や」と「山吹や」との違ひと同様に、觀方によつて何れも動かない句だと云へるのであります。この場合句の良否に就ては嚴密に云へば更に他の物尺によつても判斷を下さねば適切な評價でないことを忘れてはなりません。

動く句を詠むと云ふことは必ずしも初心者には限りません。それだけに動く動かぬが問題にされるのであります。多年作句してゐる作家でありましても、川柳とはこんなものであると云ふ安易な作句態度で句を詠んでゐる作家の句を仔細に點檢して見ますと、大半が動く句であると云ひたいほど、それほど動く句ばかり詠んで居ります。なかには流行語とでも云ふべき語彙を

濫用して、句作する作家がおりますが、そうした作家の句も亦動く句の多いことは云ふまでもありません。あちこちの柳誌で、よく名の賣れた作家の句が名の賣れてゐる割に佳吟の妙なものは、濫作から知らず識らず動く句ばかりを作るやうになるからであります。

右に述べました外に、動くと云へば動くといふことではないが、その作家の個性がよく出てゐて、大變面白いといふ句があります。そんな句は他の作家の作品に煩らはされず、自己の環境を思ふがまゝに詠んでゐる作家に多いやうであります。

要するに動くといふことは語彙の不適切によつて、或は素材の不調和によつて、内容のビツタリとしない、所謂ピント外れの句となることを意味するのであります。假りに素材の調和が、梅に鶯や、竹に雀であれば、申分のない動かない句となるのに、作者は梅に雀を、竹に鶯を配して

句を構成したといひます。梅に雀が竹に鶯が絶対にとまらぬとは云へぬのであります。が、梅には矢張り鶯の方が竹には雀の方が動かないといふれば、梅に雀を配したり、竹に鶯を配したりした句は動くといふ理由の下に、没とされるのであります。では梅に月を配したらどうか、竹に虎ではどうかと云へば、梅に太陽よりも、竹に豚よりも動かないとは云へるでせう。しかし、梅に鶯でも、竹に雀でも、梅に月でも、竹に虎でも、何れも先人の發見でありますから創作藝術の川柳では、それ等の配合で構成された句は例令動かない句であらうとも先人に功を讓つて引下がらねばなりません。例を配合にとりま

したが、動くといふことは必ずしも素材の配合に限られた譯ではなく、語彙の適切でない場合にも云はれるのであります。も一度例句を擧げてどんな句が動くかと云ふことをシツカリと掴んでいただきませう。（この項次號へ續く）

ハイキング て心身鍛錬

伊賀・伊勢方面へ
紀伊方面へ
河内・大和方面へ
のりば 上 六
のりば 難 波
のりば アベノ橋

近畿日本鐵道

川柳塔

横濱市 福田山雨樓

酒のあればどぜうすくひも出る座敷
吳清源一目勝つて秋に座す
僕の部屋狭い乍らも係長
榮轉は一人ぼつちで住むことか
いつの間にか捕手になつて二年生

兵庫縣 岩崎 柳路

シガレットケースの中の引揚證
人寄れば何んの配給かと覗き
秋や秋なんかボロロないかいな
あと味がどうのこうのとサツカリ
隣組同姓の人が還つて來
紫外線除の眼鏡で女來る
鮮魚部で譯の判らぬあらを買ひ
縹緖よし終戦後猶よい縹緖
爽やかな暮しへ他人が喰ひに來る
馬でもいゝさと百匁の列へ立ち
文化台所金屬性の音を立て
七面鳥の様な彼の娘に困ります
夕風へ胸を開いて佇つ女
腹巻が弛んだやうな年になり
其の當座その氣であつたとするく逃げ
ウラニウムとは怖ろしき化學かな
友禪の手ざわりも佳し土用干
義妹の出席
居ずまいを直して抱く六日立
丹下左膳の様なもあり鳥威し
喧嘩かと思れば鮮人等の議論

ボケットに履歴書があり押す鉤
安治川へ石炭の船芋の船
道訊けば昨日復員したと云ひ
十二貫吊皮もなく宙に浮き
焼跡の錆た金庫へ秋の雨
坐食して思案の秋の夜は永し
蟲干に亡き子の三體千字本
閑になつた神主さんの世辭を聞き

大阪市 菊澤小松園

長男出生

遅れ馳せながらもやつと鯉幟

宮 詣

長男も盥ふんばる程になり
錢を讀む乞食お前もインフレか
風鈴は硝子のすゝり泣く聲か
百圓は百圓丈けの世辭になり

大阪市 木下幽王

男女同權それから生傷の絶えず
秋の味覺も正直者は素通りか
淨瑠璃の文句そのまゝ意見され

大阪市 村上角堂

東京裁判

市ヶ谷は王手王手で裁いてる
自轉車を秋草に捨て釣たれる
長き夜に何日死んでやろ生に飽き

大阪市 浪 玲之介

大臣がなんだと思ふ日が續く
趣味に非ず今日喰べられる草を摘む

大阪市 福田妄夢

特價生地國防色が賣れ残り
一錢のことでもめたのもむかし



雜筆 春秋

言論自由の波紋

三條 東洋樹

敗戦の結果、僕等は皮肉にも自由を獲得し、云ひたい事の云へる時代を迎へた。

過日の新聞紙にも、某中學の校長が、校内の醜聞を校外へ知らせるもたとの理由で、教師の思想生活を鋭く批判した一文を掲載せる校友會雜誌を發禁にした處、マ師令部より生徒の言論の自由を束縛するものとして注意を受けた旨の報導があつたが、柳界の既成大家に共通するこの飾られたる事勿れ主義、廣告主義を思ひ浮かべて興味深いものを覺えた。まことに柳界の上層部には、柳界のイザコザを活字にする事は柳界を醜く、小さく見せる因だとの理由で、言論を抑壓し、婉曲に保身術を考じて居たグループがあつて、私などもその表面的な理由に惑惑されて戦時中、云ひたい事も云はず所謂沈香も炊かず屁もこかず、で、精彩のない日を過して來たが、この校長に對するマ師令部の一矢によりて、長い睡眠の夢から醒める思ひがした。

ひがした。

前號本誌の主幹路郎氏が、柳界の戦犯該當者とも云ふべき人々に反省と謹慎を命じて居られたが、全くその通りで、假令自己が欺されて居たとは云へ、每號ジャンパー戦争協力文章で、よい氣に成つて踊り、他人をも踊らさうとして來た責任は、一應深く反省されるべきであり、ましてこの種の活躍で首尾よく大家の座に納つて居る人々などは、改めて清算されなければならぬ。柳界の大家路郎氏が、斯くも直截な鋭い一文を、柳界の指導者達に報ひられた事は、寔に驚異すべき且つ示唆に富めるもので、若人をも躍着さすその氣迫と熱もさる事ながら、この言論の自由なる精神は、事勿れ主義三猿主義を奉じる既成大家群を情伏さするに足るであらう。

千本の印象(下)

西川 青美

夏

千本は姫路より五度涼しいといはれる。後の森から低きに流れる水の如き冷氣が座敷へ入る。早朝はランニングシャツ一枚では寒い、半ズボンの腰が冷たくなつて居る。「日暮し」が鳴くのは涼しい處だ

うらぶれたことを口紅知つて居り

尼崎市 水谷 鮎 美

ひとり旅とろく海にきてしまひ

教會の鐘海原へ響き居し

船宿の朝は水から明けはじめ

片肩の靴ゆつくり眼がきつし

石炭の山が隣りの窓に見へ

雑巾をしぼつて朝のいゝ心

肥桶の臭みを逃げず出勤す

大阪市 新川 博 也

網棚にアララ醬油がもれており

半長靴あれも闇屋のなれのはて

リニツクさへ持てば買出しかと聞かれ

淋しいね陛下が背廣淋しいね

旭川市 宮田 不 二

折入つた話なゝめに鼻をかみ

若き手と並び我が手に老を知り

拾年のながさ結婚十年目

大阪府 米本 貴志 子

負けたとて切つた裾が繼げはせじ

羊羹の望ちさしと笑はれる

里歸り貰ひ度い物書いて来る

ぜいたくの餘波切炭はぜて居る

秋風に我を惜しみてカンナ咲く

大阪市 水谷 竹 莊

若旦那様でゐられぬ時勢来る

新聞の上だけ配給樂になり

奈良縣 尾崎 方正

囚へられた殺人犯は禿げてゐず

大衆と離れ電車を止めるスト

網棚へ闇屋の手助けさせられる

争鬭の名に恥ぢず組合内輪揉め

たまぐに座れば子持ちが前に立ち

五百圓の枠で歩けば街の溜息

婦人運動男の好きな顔でなし

大阪市 市場 没食子

復興祭たゞつき合ひの灯をともし

職場ではもう老朽の域に入り

停年へ闇の商法等教へ

新發足社長の名前消えたゞけ

飲むだけでも話せる彼氏とはなりぬ

先輩の禿に歪いたゞきぬ

松茸よ今年もやはり素通りか

子の智慧に驚きながら箸を持ち

内職はみな諸代となりけり

五百圓の枠がとれない顔の色

大阪市 武部 香 林

御物拜觀はゝんぐで通り抜け

ストくく足を奪はれ目を取られ

おちよくつたやうに灯を消すストライキ

仙人に成り切れないで芋も買ひ

メガホンの同じ穴から民主主義

蚊も失せて心に泌みる銀の月

拾ひ屋の背に一枝秋の花

復興祭紺の暖簾もまだ見えす

十一月三日憲法發布

玉音をしたしみ易く身に受けて

岡山縣 大森 風來 子

きみいとし洋裁塾の隅で縫ひ

いとしさよ嫁く身に鉄や鎌の夢

といふから千本は避暑向の土地であるう。

井戸水に冷やしたトマトや胡瓜

は、都會のミゾレやソーダ水より

も旨い。茄子や南京は親戚に分けてやつてもまだ餘る。

日中はさすがに暑いので夕方の

四時から七時までみつちりと畑の

手入れ、水肥や水をやつて風呂に

入る。風呂の窓の外に竹藪があつて山奥の温泉に居る感じがする。

夕食後縁側にあれば、はや座蒲團はひんやりと冷えて居る。

千本で一番好いのは月である。

七夕の笹を川へ流す頃、東の山あいにぼつかり浮かぶ満月は玲瓏そのものである。目近に迫る高い山の嶺から嶺へ月は静かに這ふやうに移動する。

「寝るのが惜しいなあ」

いつ迄も雑談してる間に軀も心も水の如く清められる。

停つてはそろそろ近る嶺の月

小さく區切られた水田が數百數千と津山の方へ續く、兩側に山々が迫つて大きな溝の底に居る感じがする。早朝六時野道を歩く時の氣持のよき。

水田にかぶさるやうな山の影

青 美

蚊が多くて鶏が弱るのが可愛さう

だ。鶏舎を出してやると元氣に走り廻る。蟋蟀の小さいのを追廻して居る。諸畑一杯、羽ばたきして三四間は翔ぶ。卵を呑みに来る蛇

も三四匹殺してから安心するやうになつた。

「今日はバ、蟋蟀大會よ」

魚屋も肉屋も無い千本では無理もない。食膳には胡瓜の鹽もみが皿一杯出る。生まの茄子が出たら本當に蟋蟀になる。

秋

「うちもよんべしに蓆をやられたはあ」

野猪の被害を頻々と聞く。近頃は子猪を二三匹連れて食糧疎開のやうに人里近く移動して来る。蠅ですいた通りに土を掘つてゆく。皮を残して中味だけ食べる。小豆などは播いた種子を一粒づつ奇麗に拾つて食ふ。獵師も居るが仲々射てぬ。それに頭の黒いシ、も此頃出沒して 南京や 茄子を盗られる。初めは疎開者が脱まれて居たがどうも地の人らしい噂が立つて来た。

「シ、鍋が食べたなあ」

など云ひながら未だに機會がない

シカシ、鹿の肉は、時々手に入る。百匁甘圓は②かどうか知らぬが値段に相應しい味で脂がなく旨くもない。營養價を強いて算出しながら食ふ。

疎開第一年の秋、終戦後の物思ひにふける時、向側の山のあちこちに牝鹿呼ぶ鹿の聲が手に取るやうに聞える。二上り新内を思出し京都を思ひ、奈良を偲ぶ。稔の襟をかき合はせて千本の晩秋を惜ん

姫路市 夷 一笑

買すきの古着屋ほどに女房溜め皮算の見る見るうちに年の暮宿がへこのこんたとこまで来てしまひとうがらし軒にわすれて越してゆき女房のゼネスト飯がこげてゐる

奈良縣 上田 翠 光

明されぬ乙女心は窓に寄りさまよへり琴の餘韻をしたひつゝ

堺市 戸田 孤 鐘

半分は虚榮祭壇出来上り新任の女教師ピンポン勝ちつゞけ落丁のまゝ講談を読み終へる

夫への愚痴の似てゐるあねいもと秋風や漢語をつかふ村に住み

大牟田市 高田 抱 逸

買ふならと農家に芋を掘らされる履歷書に一度蹴られたとも書けず役所今日雀がとまつたやうに暇

岡山縣 鈴木 九 坡

飽食の人に意見をされて来たへとく果ては失業者と呼ばれ又しても昔の貨幣價値を云ひそこいらでお茶でもなどもう云はず

大阪市 橋本 美奈子

おそれおほくも陛下の夢にさめた朝

(不朽洞にて路)

私はむやみに出句をすゑないことにしてゐる。すゑめられて止むを得ず五句や十句を投じたからと云つて、すぐれた句のあらう筈がないからである。ひとからすゑめられなくとも、止むに止まれぬ作句慾が生んだ作品には裁法の巧拙は別として迫力がある。不朽洞會員の最近の作品では柳路君の句が断然光つてゐる。張家口から引揚げて来た柳路君の胸奥には、今までに経験したことのない大きなやみが蟠つてゐるのに違ひない。諦めても諦めきれないものがあるのに違ひない。

い。「腹巻が弛んだやうな年になり」の句を見て私の眼底には涙があつた。「十二貫吊皮もなく宙に浮き」の句は同君の有爲轉變を如實に語るものでなくてはならぬ。句は時代を反映もするが、尤も手近かにはその人に鋭いメスをもつてのぞむものである。持てるものゝすべてを失つて、遙々と祖國へ引揚げて来た君に、今や精神的なものゝ大きな力が首をもたげてゐることが判る。私は君の前途を句を透して見届けやうと思ふ。誰彼の句を見ても、もう虚脱状態でなくなつたことだけは確である。しかし、精神的なものゝ飛躍を感ずるところまでは行つてゐない。ウンと勉強がのぞましい。

○

麻生 葭 乃

伊賀妙慶寺にて

かまへ焚く枝は梅栗柿しきみ増産の手は境内へまでも伸び

上野市へ移つて

開墾の畠は一里さきの山盗み手はないが鳥が喰ふ畠

上野秋祭に

何依とかへたか帯の金通し終戦後の大阪にて

焼跡は豊作茄子も花ざかり

台所父が歸つた芋の嵩雨

大阪市 橋本 緑 雨

日曜のストを畑で暮す也賣喰ひと聞いて親戚よせつけず

大阪四組合争議

商談の折靴米も入れて有

金澤市 安川 久留美

珍客が萬年床の奥を見るお土産のリンゴ受取る孫も居ず

齒のとれた櫛老妻は五十五か

何を云ふ藝術的な髪といへ

金儲チヨット自轉車かして呉れ

だ。

「ウオーイ」

禁獵期があけると、獵師は忙がしい。獵師の聲は大きい。山の中腹らしい處で豆粒程の人間が出す聲だが山から村へ、里から山へこだまして響き互る。銃聲、犬の聲頻り。

村村へ鹿逐ふ聲のすき通る

青 鳶

山村の冷氣、揖保川支流の朝霧は深い。竹藪も森も人家も、炊煙も、パンキの刷毛ではいたやうに眞白くなる。その霧は大軍の移動するやうに川下へ押流れて行く。忽ち晴れる。

朝霧を裾に這はせて山は晴れ

青 美

柿實る山村の日本晴れは美しくい。

秋祭りに米と交換したらしい

銘仙や錦紗を着た娘や女兒、カツ

ターシャツの青年、老人も幼児も

村社に参詣して、浪花節に半日を

楽しむ。おはぎやばた餅を澤山に

擡げる。この日に野良に行く人は

嘲笑されるから疎開者も畑をしな

い。

冬

姫路より寒い、佐用、上月、津山より暖かい。とはいふものの、阪神に永く住んだ者には千本は底冷えがする。

佐用以北は冬眠に入るさうだが

千本では薪木、柴刈りに張切つて居る。一東驛渡し⑤五圓とか、一日山で働けば三十圓以上になる。行かねば損だ、行かぬは馬鹿だ、とばかりに親父も息子も行く。繼ぎはぎに刺縫の厚着を丸々と着て頼鋸割らぬ村人は一升飯の辨當に斧や鋸や繩を擔いで早朝から白い息を吐きながら山へ急ぐ。

薪刈りに行く村人は熊のごと

青 美

雪は多い。あばら家も舊家も、襟に白一色となる。牡丹雪であるからふかふかと温い感じがして、陽が照ると暖かい。しかし流石に土は凍て、道は堅い。

秋祭りとは正月とは田舎の最も楽しい行事である。映諸館も寄席も

無い閑村だから食べ物を色々造つて人を招び、人に招かれ、食べて

は話し、話しては食べる。

師走早晩、大竈には一抱えもある

松の新木を二三本入れて紅蓮の

解が上つて居る。蒸釜の湯は最高

調にたぎつて居る。幾計かの糯米

が洗つてある。老母の指揮で若い

人達はせつせと働く。忽ち擡上る

餅、握り出す餅、餅箱はさつさと

椽側から座敷へ竝べられる。擡き

たての餅に餅をまぶしたり、大根

卸しにつけたりして立ち食ひが始

まる。一位位べろりと食べて了ふ

但しこれは某舊家の光景である。

晩間に竈の煙、擡ぐ姿 青 美

(二一、八、二三)



森東魚さんを憶ふ

石原青龍

○森東魚さんは敗戦後虚脱といふことばもまだ聞かなかつた十月二日(昭和二十年)の未明、北平間組支店の宿舎で脳溢血といふこの人らしい急病で亡くなつた。前夜發病の後臨終に駆けつけた柳友は品川陳居士だけで、私たちは間に合はなかつた。

○アメリカ軍が北平に進駐を開始した頃で、物情騒然たる裡に、間組の葬儀が行はれ、式後直に精進落しをやり、それが追憶座談會みたいなものになつた。その時の話にも間組の建築技師工學士森榮一よりは、古川柳學者森東魚の方が比較にならぬほど有名で後世の歴史に残るといふことで、私達柳友大に肩みを廣くした。

川柳を愛するの詞を誓いた色紙を寄せられたことは、川柳が日華の文化交流面に登場した最初の出来事として歴史的である。

○東魚さんは江戸ッ兒で、正しい意味の通人であつた。私の理想とする「酸いも甘いもかみわけた人間で、人生の苦惱を充分に味ひつゝ、しかも洒々落々としてそれを表に出さない」といつたやうな川柳人に最も近い人であつた。事實家庭的に極めて不幸な人であつたらしいが、そんなことをおくびにも出さず、いつも接する人を朗らかにさせてゐた。

○東魚さんの恩師久良伎翁に對する情義の厚さには敬服させられた。私などが知らぬまゝに久良伎の句の拙さや、議論の偏狹さをとりあげると、いつもムキになつて辯護してゐた。その時だけにしか東魚さんはむづかしい面を見せなかつた。

○東魚さんは亡き柳友夜叉郎に心から傾倒してゐたらしい。いつの集りでも一特に一ぱいでもはいらうものなら、必ず一度は夜叉郎がどういつた。夜叉郎の句にこんなのがあつたなどといふ話を持出し

た。これほどの厚い友情は古今にわたり極めて珍らしい。○東魚さんはものぐさといふことを知らない人であつた。

物事を極めてくめいにして、いいいにする人で、文獻などがそれがほかに手に入らない場合、どんなめんどろなものでも自分で寫し取る勞をいとはなかつた。この事は死後の遺留品によつて特に感心させられた。

○東魚さんは川柳作家としてあまり知られてゐないが、古川柳學者としての多年の経験と、眞の通人としての人間的な裏づけからして、作家としての力量は非凡なものがあつた。内地では久良伎社時代を除き殆ど作句をやらず、句會にも出なかつたらしいが、北京では吾々がムリにひつぱり出すのでツイ句會にも出、作句も相當やつた。私は引揚で資料一切を棄て、來たので憶えてゐないが、北京時代の東魚さんの句をまゝとめてみればリツパなものが出て來ると思ふ。それは古川柳の眞髓を現代の事物に於て活かした作品で、「不易の川柳」の模範的なものだといつて可い。信ずる。今さらせんなきことながら、古川柳學に大した興味を持たない私は、東魚さんがいま生きてゐたら、古川柳研究はこのへんできりあげて、後半生を作家として立つと同時に川柳指導者として立つ

てもらふことをお願いするにちがひない。

(昭和二一、九)

随想

久留美

川柳は作るものでなく生れるものである

▽

私の近所に『古酒』といふ姓の家がある、主人は御酒がキラリ又、その近所に『柴田勝家』といふ靴直し家さんがある。標札がだんだん大きくなつた、いゝ廣告である。

▽

私の行きつけの本屋の電番が九九九、有がたうサンキ、サービスがよい、九を苦にすること無用だ……

▽

燃料不足で途上に松葉を干してある、それをよけて通る人が少ない日本人は公德心に欠けてゐる

清談・商談
お待合せに

喫茶
みどり

みどりでの商談
運が向いて來る

上六交又點西北角

創製的新治療劑

ネオハツモン

コメット

黒田製藥株式會社

本社
新春句會
一月十二日午後一時
住吉の生根神社で

品質優良

ペン先・針ピン・ゼムクリップ

立川ペン先製作所

上野市

近作柳樽

資本家となつて同志をうるまじり 池田市 牧人
 仲裁者ともに探してやる時計 同
 何んで儲けたか仕立おろしの背廣 同
 ぜんざいがほんものだつた姦しさ 同
 母と歩るく伸びも伸びたる娘の姿 同
 一方の足が短かく判を彫る 同
 老眼鏡隠居も出来ぬ忙しさ 同
 辨當に細々つめる闇の米大阪 同
 支店長始め課長も皆食へず 同
 舊友に逢へて一杯のめもせず 同
 ソイヤツの相場を聞いて恐入 同
 車中談總理は葉巻喫ひ乍ら 同
 國敗れたれども凛と菊の花 同
 問題の金で妾も贅澤し愛媛縣 同
 ゼネストへ自己擁護的賛否論 同
 父の靈夫の靈となる遺髪 同
 正道をふまず矛盾を楯にとり 同
 報道がニュースにかへり和の世界 同
 民主化に消ゆるか日本髪 同
 遠慮なく秋風に次ぐ冬の風京都 同
 メチールちやありまぜんよ酌いけれ 同
 ダンサーも家へ歸れば火吹竹 同
 高文をとる積りなり積りなり 同
 孝行をあんまり言はぬ民主主義 同
 それぞれの思ひ新たにする匂ひ 同
 神戸市 凡太郎
 盛り切りの中に豫算の底が見え 同
 わりきれぬ氣持で菊を知らされ 同
 同性愛心中「餓死」のデマも消え 同
 西宮市 俊郎
 隣組精神落ちず芋のつる 同
 五六人誰も時計は持つて居す 同

もう米にするものがない妻の愚痴 鳥取縣 悟志
 恩讐を超えて 罐詰ゆき渡り 同
 剃ぐだけは剃いで身に沁む秋の風 同
 闘争委員ほんに野生の顔ばかり 大阪 同
 晝休み日向の猫の様になり 同
 果物屋暇でリンゴを拭いてゐる 同
 朝飯は未だかとピースの列に入る 大阪 同
 民主主義小さい事で採めてゐる 同
 ソフトボール白衣に午後の陽は高し 同
 開業へ患者が闇を持つて来る 岡山 同
 耳だか出来たとストへ振り向か 同
 大山に似て人情のまろやかさ 同
 リゾールの中に微かな化粧の香 岡山 同
 看護婦はあんな男とよく喋り 同
 白マスク便所の扉蹴つて出る 同
 一列の中で 臨月はヨからず 松江 同
 物干で隣と話すいゝ天気 同
 交代をしてから守衛たゞの人 和歌山 同
 趣味が合ひ地位といふ字を薄く 同
 スマートな脊廣将棋のさせる柄 大阪 同
 十圓に一匹不足母の膳 同
 運動會天下晴れての手を繋ぎ 大阪 同
 復興祭と云ふに壕舎に住んでゐる 同
 配給のお頭つきが父の皿 大阪 同
 パラツクでどうかこうかはやつて 同
 愛知岐阜行幸 同
 萬歳が號令もなく湧き起り 兵庫 同
 行在所聞けば聞く程民主主義 同
 一人居の化粧を終えて里へ書き 岡山 同
 抱擁のなほあきたらぬ夢をもち 同
 日をよけて右側歩くことゝなり 奈良 同
 敗戦日本に増産の秋至る 同
 五風十雨天道未だ地に墜ちず 徳島 同
 當然の様にオン鶏すまし込み 岐阜 同
 おつさんと呼ばれて歳をふり返り 大阪 同
 餘念なく菊を作りし父は年 大阪 同

川柳不朽洞會だより

▼中島生々庵氏(堺市)は川柳不朽洞會理事長として、川柳不朽洞會の發展に大理想を懷き、併せて川柳雜誌社の將來に對しても深思されてゐる。具現の一策として来る十二月一日午後一時南海線諏訪ノ森會館に於て川柳濱寺支部の發會式句會を開催されることとなり戸田孤蓬氏を支部幹事に推された▼水谷錦水氏が滿洲から令弟の竹莊居へ引揚げられ、目下出版事業開始のため東上されてゐる。▼水谷鮎美氏(尼崎市)は十月廿日大山町のすげ笠川柳社主催の全國川柳大會へ出席された。▼北川春巢氏(滋賀縣)は大阪鐵道教習所教官となられ、目下米子分教所視察のため出張されてゐる、近く教習所で川柳會を開催されとのことなほ白濱療養所の川柳會は從前通り月一回出張して指導される由▼上田翠光氏(奈良縣)の御令閨には第二女を御安産になられたお欣び申上げる▼古川風竹氏(ハワイ)から麻生路郎先生に慰問小包が届いた右は國際郵便小包によるもので、かほりの高いコーヒヤシユカーやミルクや其他で編輯室は

技術本位で大衆的な

工藤清寫眞館

肥後橋交叉点
電・土佐堀 2900番

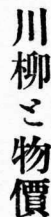
歡聲。一番先に御馳走になつたが香林氏贈主は川柳不朽洞會員の風竹、一浪の兩氏と小田社長だつた▼戸倉普天氏(兵庫縣)は精米、精麥、製粉の共同施設を計劃、獨力で電動機、高壓電線、電柱、變壓器、精米機、精麥機、製粉機等を設置、設備一切を完備して一般住民に開放される由。▼古川麗花氏は名古屋から大阪に轉動された。▼下記の方が川柳不朽洞會へ入會された―中島鐵洲氏▼下記の諸氏は會員種別變更―村松夢裡氏(大阪市)維持會員へ、福田安夢氏(大阪市)維持會員へ

安産のために

ワダカルシウム錠

大阪府大淀區豊崎東通一ノ四六ワダカルシウム本舗

安産メータ・文獻進呈



の
話

麻生路郎

こゝに挿入した廣告を見て慌てゝ飛び出してゐらつてはこまる。これは七八年もの前の新聞に出てゐたかしわ屋の廣告である。「酒飲み次第すぎ、喰喰次第で僅に二圓なんて、全く嘘のやうな話。おまけにチツプまで含まれてゐるのである。しかし十人様以上でない」と受付けてくれないことと開宴から三時間と云ふ條件がついてゐる。三時間も飲んだら喰つたりしたら金よりも胃袋の方がまゐつてしまふだらう。それに近ごろの闇料理店と違つて、おれ辭もチャヤ／＼云つてくれるし、こぼれるやうな仲居さんの笑顔も見られるし、電話のお取次もしてくれるし、お絞りの一つも出してくれるし、又お近いうちにと店先まで送り出してくれるし、靴がなくなる心配もないのである。これは別勘定ではあるが女房への土産の折詰も提げて歸りたい人は提げて歸れるのであるから、今の若い人達に聞かしたら、私達の若い頃に、老人から天保銭

一枚で伊勢詣りをした話を聞かされたよりも以上にホントにしないかも知れない。鶏すき焼だけの喰次第は一圓であつて驚く勿れ、銘酒一本が廿五錢ツブは五十錢位に願ひますと云ふのであるが、喰べに行く人が別段行列もしてゐないのである。そのかしわ屋も戦災で今はあとかたもなくなつてゐる。

その頃の川柳に
三越でせめて十圓欲しいなり
と云ふのがあるが、林檎一ヶ
が十圓もする近ごろの十圓と

明治の末葉に、川上日車君が、さあこれで米を買ひなと五圓札と云ふ句を詠んだことがあつた。當時、評判のよかつた句だ。その頃の米の値段は一升十二三錢でなかつたと思ふ。この句は貧乏生活をしてゐる人間に恵ぐんでやるのに、五圓札を一枚投げ出したのである、その頃の五圓の貨幣價值が相當のものであつたことが知れやう。今の五圓はどうであらう。先にも述べたやうに一ト握りの葱の値段でしかない。

いのである。

郷土作家高橋かほる君の

句に、
巴燒五十錢が

七十八年前の新開廣告

喰 酒飲次第喰火次第 貳四
但し十人様以上は共同喫下二膳也

次 かしわ水たき喰次第 同五十美
鶏すき焼喰次第 壹四
銘酒一本廿五美、肴二十美、位一兩六分七厘

第 雪戸橋北詰更六四二どり菊

比較して貨幣價值も隨分と下落したものだと思ふにせられる。以前はすき焼の葱なんか肉屋でサービスして呉れたものだが、近頃は僅一ト握りの葱が五圓もしてゐる。一ト頃一尾が八錢位した鯖が五十五圓で錢湯が八十錢、散髪が八圓、チックが三十圓もする。

私は物價と云ふことに就ては人一倍興味をもつてゐるが金儲けと云ふことに就てはそれほど興味が持てない。生き物のやうにピチ／＼動く物價の變動をジツと眺めてゐるのが面白いのだ。

○ケも買ふ人はメツタになかつたのであることが、この句から類推出來やう。近頃喫茶店の陳列に並べられた饅頭が安いので、一ケ三圓、店によると、五圓も六圓もしてゐる。従つて友達とお茶の一つも喫うと思へば百圓札の一枚位は飛んでしまふのである。五十錢でお酒を飲んで、御飯を喰べられたのも八九年前のことです。で嘘でもない。

一萬圓位なかなか儲からずこれは亡くなつた矢田冷刀君の句で大正末期の作である。その頃の商人は口では一

萬圓位と云つたが、さてとなるとなか／＼儲らなかつたのである。そこにこの句の穿ちがピンと來たのである。しかし近ごろの一萬圓はそんなに大金だとは云へなくなつた。一ト間ぎりのバラツクを建てゝも、三萬や五萬は要るんだ。そうな。

のですが、見真似聞き真似で六ヶ敷かつたトマト、南瓜などにも大分自信を得たやうです。お百姓に正直者が多いのは明け暮れこうした自然の生活にひたつて生きてゐる影響が多々有るのではないでせうか。

熟すをも待たず南瓜は影を消し

若菜

初成りの南瓜が逃げてほかんとす
香林

知ることの出来る句は相當にあるが、今一々それを紹介するの煩にたえないのでこれ位で「巴燒」の句以外は直接物價を表はした句ではないが物價に關聯を持つてゐる句なので引用したまでである。(終)

この四坪農園も簡単に出来たものではないのです。總面積の半分は土中深く笹の根がはびこつてゐて難工事と見てゐた私は、永らく着手を鈍つてゐましたが配給皆無の苦しみで愈々開發を決意しました。橋架けて南瓜の出来を見に廻り

鍬を握る

武部香林

われ市民いぶせき畑に養はれ
若菜

を掛けて大奮闘の末獲得した二坪

胡瓜百數十本、南瓜拾個、トマト百個、甘唐辛子約五百個、大根人

です。

麥計五拾本、干瓢一個、胡麻約勺

香林

うまい菜、にら、いんげん豆、三葉、等々若干。

方を計るより手つ取り早いからで
す。此秋探れるさつま薯は是非目

これが私の四坪農園から採れた金
簪からの文憑です。

方で報告するのが妥當だと考へて

掛け過ぎた肥を主人はくやしがり
香林

終らぬやう念じてゐます。

鍬に馴れ施肥にもなれてわが暮し
 若菜

昭和二十二年八月 香林記

耕作の勞苦の殆んどは若衆がやる

昭和二十一年六月

三

きびとら

三

夫顏水
桃谷

—

—

スト私觀

路
郎
生

私の門下にある女学校の先生がゐる川柳のことです。やつて來たので『ストが流行つてゐるが、君とこはどうだぞ』と駄いて見た。ところが、

『駄目の學校は私學ですから、ストをやつても駄目です』と云ふ。どうして駄目なのか、その理由は聞かなかつたが、

『教員の労働組合はどうだネ』と再び水を向けて見たら、

『はじめ組合に這入ることは這入りましたが、そのまゝです。別にことわると云ふのも變だから、そのまゝにして置かうと云ふことになつてゐます。』とのことだつた。

『そうたらうネ、僕は第一、教育に携はる人達を労働者扱ひしたくなく、と云ふ仕事は労働だつたら、労働でない。仕事はないことになる。そんな意味で労働者のすべてが組合をつくり、労働者のすべてが、ストをやるとなり、妙なものが出来るぜ。電車をやるとやつて乗れないやうになるのはまあ仕方がない。と仕方がない。電燈がストをやつて点かないのも仕方がない。と仕給へ。看護婦や、見るまでもないぢやアないか。眞逆醫者がと君は云ふかも知れぬが、病院の醫者が労働組合を作つて騒いでゐるんだから、社會問題と云ふよりも、人道問題だよ。病院の醫者がストをやつたために、その要求に應じて何項目かを承認したころには患者の過半數が死亡してゐたと云ふのでは、どうにもならないと思はないかネ。或は、それ以上に悲惨事だよ。病院の患者なら、ハッキリと何人が犠牲になつたと判るが、交通が幾日も停止されたら、電燈が幾時間も消燈される社會の損害は莫大のもので一寸計算が出来ない。ぢやアないか。あきらかに眼に見るが、一ト眼に見る對しては戰慄を感ぜるが、諸の買出しに行つて案外平氣でやつて、無智過ぎるでは、

句道場から

スベースの關係上、句會の作品が未發表のまゝ、いつとはなしに机上に堆積した。折角の力作をこのまゝ葬つてしまつては申譯がない。せめて句會の面影が偲べるだけの句は残して置きたいので精選採録した。諒とされたい。(編輯局)

時局批判川柳大會

一月廿七日十三時・於四天王寺
この日雨だつたが多數參集した

選舉權うちにも五票ございます
耳を堀りながら選舉を考へる
總選舉恩師も遂に立ち上り
總選舉の聲ばかりする總選舉
略歴に養子と知れる立候補
選舉屋でござる小父なり髭があり
一票を入れて父娘の夢を踏む
一票へ國の安きを希ふ筆
總選舉昔馴染の名を見つけ
立候補米の要るのに困るなり
風邪ひいたまゝで選舉の日が迫り
曉方に雨が上つた門出なり
ひとことのやうに笑つて門出よし
親の手の温み門出に握りしめ
母上は門出の酒に酔ひ給ひ
兩替のつもりで買った寶くじ
寶くじ當るものと女房云ひ
空くじが財布の中で忘れられ
お役所へ頼らぬ家が建ちはじめ
甍る町へぜんざいしるこ店
再建へ親分の顔借りにゆき
再建の一步が墓の草むしり
新しい下駄で顔役話しに來
顔役が笑つてそれで話しになり
顔役の氣遣がよくておつかなし
顔役の革ジャンパーへふくみる
顔役の貫祿顔を見せた丈
青雲

庸司
同
克容
紫香
水府
角客
白柳
喜代志
路郎
葉
定信
小松園
庸司
白柳
竹莊
妄夢
庸司
同
克容
角風
水客
同
茂角
風角
青雲

くすぼつた疊も信者にありがたく
信心のそれから嫁にやる話
雨の日も信者としての音をたて
信ずれば珠数の艶さへ有難し

美奈子
水客
喜代志
小松園

三月例會

三月十七日十三時・於四天王寺
新園でチップを出した時の人路郎
新園にホクの貯金を出されて居同
新園にネエとお茶だけ出しておき同
新園になつて眞直ぐ歸るなり同
しばらくは臍くのない新紙幣千舟
新園の筈だに青樓のこの騒ぎ没食子
新園の無心あつさり斷られ東風
新園になつて逢ふ瀬がへつてゆき竹莊
軍票と間違へられた新紙幣使君子
行き倒れ意外に新園持つてゐる春海

頭腦覺醒劑

ゼドリ
ン錠


 疲勞感除去、心氣昂揚
 作業能增進、睡氣防止
 大阪市道修町武田藥品工業株式會社

新聞をしもやけの手でとるねえや
トランプをおもふ新聞裏返し
ひねくれの兄に無所屬性に合ひ
アカハタが工場歸りへ賣れてゆき
持寄つたウツを固めて黨が出来
満員の車中で肺だとも云へず
満員へ母親としての聲を出し
満員車も一人だけ押して乗せ
瘡高い聲で切手が不足です
不足云ひくらくら行ける面白さ
不足云ふ妻を制へてコーヒ入れ

美奈子
鮎美
千舟
好郎
翠容
克光
美奈子
竹莊
勢三
没食子
千舟

川柳忌

九月廿三日・於住吉大社

別れるは惜しむ自轉車押してゆき
竹莊

川柳忌

九月廿三日・於佳吉大社
別れるは惜しき
自轉車押してゆき
竹 莊

自轉車を停めて魚釣見てるなり
自轉車にも乗れず重役遅れて來
自轉車で足る引越しのあつけなき
自轉車に積んで戻れば闇屋めき
幽王

葺狩句會

十月廿七日・北攝多田神社の奥
この日吟行日和、川柳不朽洞會
有志で舉行。

喧嘩した家へパイプを忘れて來
先方の親はパイプが氣に入らず
山小屋のパイプ落葉を見てゐたり
根元まで吸へばパイプの安つぱく
蟲泣けば用もないのに手紙かく
ふるさとは蝗石から左から
かまきりのアベツクミナヅキの月
後の子が蝗の脚を繼いで居る
くもの巢ヘジャケンに泳ぐ竹箒
こぼろぎを猫が捕へたにぎやか

十一月例会

十一月廿四日・於佳吉大社
晴、珍類多數出席

行幸のさてもくの變りやう
靴下でドテラ着るのも旅のこと
のほふんと宿の浴衣が橋に立ち
ポチ袋の用意などして旅慣れる
だんだんに馴ければ相手は旅役者
旅馴れた袍寝間着を入れただけ
大阪と知れてお米の値を開かれ
宿帳を見ながら亭主顔を出し同

菜
同
同
同
同
同
同
香林
同
同
白面人
翠光
小松園
路郎
白面人
香林
同
小松園

『別に威張つてゐる譯ではないが、僕はステッドの新聞でそんな文字を見たらして嫌だ。日本は國家が軍閥のためにバチヤンコになつたので戦争と云ふものを全然抛棄するのを諫めて再建しやうとつてゐる文化國家を以てしては戦争に類したことを毎日平氣で對してゐる。それは世界へ自慢の一つに云ふよりは血眼になつてやつてゐるのだから呆れるぢやないかい』のせう？』
『答は至つて平凡だよ。動くより外に手はないんだ。みんな寄つてジャンク消費したいんだ。今度は黙々として働くんだよ。僕が働いてゐる手ぢやないかい』
『でも幾ら働いても月給は同じでせう』
『さうさ。働くのさ。働かぬわがくらし樂くさ。』
『だもどりジツと手を見る、なんて云ふのは歌とて面白からうが、實際政府も働かぬが鈍いから、政黨も働かぬがせん弱く、自身のためにしか働かぬが常だ。彼等でも背負ひ投げを食つてメソクしなけりばに生きたる僕は倅せだ。』

[illegible]

心齋橋筋
諏訪町角

▼添削批評の希望者は本誌の直接購読者であること▼句数は一人一回五句以内のこと▼選者の振當はお任せを願ふ▼返信用封筒に宛書し返信の郵券を貼附、なるべく手数をかけないこと▼會費は一回參圓▼句稿は川柳雜誌社サビズ部添削と批評係宛のこと、

であらう。要するに『法醫學ノート』一卷は川柳人への常識講座だとも云へる。一讀をすゝめたい。四六版二六八頁で定價は廿五圓である。發行所は東京都麹町區飯田町一ノ六東洋書館。

P
★
P

▼前號所載の『雜感二三』は豫想以上の反響を喚んだ。あの一文によつて老大家が懐いおのゝいて反省してくれ、若い川柳人がハツツとして起ち上つてくれるなら筆者としては望外の歡びなのである

老大家の反省は兎も角、新人よ、起ち上つてくれ▼石原青龍氏(舊號青龍刀)が、北京から東京に引揚げられた。支那研究の權威で、川柳人としては滿支の重鎮で内地でも古くから知られてゐる人であるが、昨廿年十月、北京で客死した古川柳研究家の『森東魚さんを憶ふ』の一文を寄せられた。本誌の讀者は、十有餘年間本誌のために『武玉川研究』の稿を梅本座山翁、蛭子省二の兩氏と共に論議されてゐた森東魚氏の記憶を新にされることと思ふ▼福田山雨樓氏(横濱)は川柳不朽洞會の俊銳で氏の在阪當時は本誌の直接編輯にも携はり副主幹に擬せられた人、久しく筆を絶つてゐられたが今回本號巻頭に掲げた『憲法と川柳』を寄せられたので味讀を乞ふ▼三條東洋樹氏(神戸)は『ふあうすと』の同人で言論の雄として自他ともにゆるすの人『言論自由の波紋』を寄せられた特に御愛讀を願ひた

募
集

毎號募集 (毎月五日締切)

近作柳樽(雜吟廿句) 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▲投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雅吟を募る

▲『川柳塔』への投稿は不朽洞會員に限る。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事

あるが、出来るだけ早く投じていただきたい▼各地の支部がボチボチ活動をはじめました、随分長い冬眠状態からいよいよ脱する時が来たのである。此の際新しく支部を希望する方も申込まれたい。編輯はベージュの増すに従つて新味を出して行く事にする。諒とされた

い。▼蘆村忌(霞乃女の亡父)十一月十四日が河盛蘆村翁の十七回忌に相當するので一心寺で法要を修した▼深井凡々氏(奈良縣)は

い▼西川青美氏(兵庫縣)は『千本の印象』の續稿を、▼武部香林氏(大阪)は『銀を握る』を、▼安川久留美氏(金澤)は『隨想』を、▼路郎主幹は多忙の中から『續川柳講座』ならびに、『川柳と物價の話』『スト私観』『不朽洞句抄』等々すこぶる盛り澤山である。▼本號から『近作柳樽』や『川柳塔』や文章などの募集をはじめることとした、締切日は掲げて

引揚柳人激勵誌上句會を『むつみ』十二月號に發表するため目下努力中とのことである。▼三鴨美笑氏(鳥取縣)が朝鮮から無事引揚げられた▼高峰柳兒氏(長野縣)は南の國から無事引揚げられた由▼山本孝氏(山本雨迷氏の愛婿)が十一月十一日に堺市の雨迷氏邸で永眠された、享年卅歳、今孝の名で卓球日本を世界的にした日本一の名選手、將來のオリンピックで新日本の名聲を稱揚してくれるものは水泳と卓球しかなかつただけに、氏を喪うたことは日本の大きな損失である廿四日に三津寺で日本卓球界はじまつての卓球葬が執行された謹悼。▼川維出雲支部(出雲市)の二十周年記念川柳大會が十一月十日午後一時から同市公會堂で華々しく開催された本社からは路郎、綠雨の兩氏出席。支部の今日があるのは尼綠之助氏が廿年間支部幹事として終始した賜である。歡びに燃える多數の地元作家に松江支部の來援があつて頗ぶる盛會。夕刻一旦會を閉ち、午後六時から路郎主幹の歡迎宴が張られた。主幹は同夜驛前の旅館に一泊、翌日綠之助氏訪問。▼川維松江支部(松江市)では山根泉人幹事のきもいりで十一月十一日夜、麻生路郎師に川柳に關する質疑を座談的に訊く會をなわ旅館で開催した夕刻、路郎師は綠之助氏の案内で宿に着き食後座談會に出席十時半頃まで支部の人々と語つた。綠之助氏と同宿に一泊。▼麻生路郎主幹は十一月十二日午後

二時鳥取驛下車、八歩居を訪問、夜は大西八歩、中島鐵洲氏と那座歡談、翌十三日午後十一時歸阪。▼本社十一月例會が来る十一月二十四日午後一時より住吉大社で開催▼大阪通信病院川柳會から『川柳烏ヶ辻集』が出た、十月三十一日に開いた句會報である。市場没食子氏の『竹莊氏を語る』を所載▼千石莊文化部第六回川柳會(貝塚市)では来る十一月三十日午後一時に麻生路郎師指導の下に句會を開催する▼大阪日日新聞社から日サロロンが刊行され、その柳壇を路郎主幹が擔當されることになつたので柳友諸子の投稿を切望する。▼印刷所全員が本誌のため協力されたが、一巻五號を年内に刊行出来なかつた。フン起々々

普天隨筆

戸倉普天著・麻生路郎序

川柳人の隨筆の面白きは又別である。この場合の面白きは滑稽といふ意味ではない。辛辣に近い觀察の鋭さの謂である。著者は日東紡産業の事務(實費三〇圓送料二圓半で頒つ

川柳雜誌

「川柳雜誌」の再刊舊號

定價一部三圓送料三十錢
大正十三年本誌創刊以來のパツクナンバー(但し欠號あり)
菊倍時代一部五圓三〇送料共
菊倍、四六倍時代一部三圓三〇送料共

新川柳評釋 (賣切)

御注文はすべて小爲替のこと
大阪市住吉區萬代西五ノ二五
發賣所川柳雜誌社出版部

B列5號 每月一回一日發行
川柳雜誌 第一號 第四號

一冊 金三圓

一ヶ年十二冊 (送料三十錢) 金三十六圓 (送料三圓六錢)

昭和廿一年十月廿五日印刷
昭和廿一年十一月一日發行

大阪市住吉區萬代西五丁二五番地
行印發 麻生 幸二郎

發行所 川柳雜誌社
振替口座大阪七五〇五〇

化膿症に スルファミン錠
ゲリマン錠
アルパジル錠姉妹品